

## 痴呆性老人専用デイサービスセンター利用者の承認欲求を高める個別援助技術に関する考察 ～ 福祉レクリエーション援助の視点より ～

滝口 真(西九州大学健康福祉学部)

### 1. 問題

痴呆性高齢者毎日通所型(365日開所)「いずみの園痴呆型デイサービスセンター(旧:E型)」(大分県中津市)は1994年特別養護老人ホームに併設され8年目を迎えた。利用者である高齢者の多くは40年、50年という長い間の就労や社会的役割にピリオドを打ち第2、第3の人生をスタートさせざるを得ない状態にある。若い頃一生懸命に汗して家族や子ども達の為に働き、社会的役割を果たし「承認欲求」を満たした経験のある高齢者が、現在の自己の存在に満足できず意欲低下やストレスとして生活行動に心の乱れの一部が現われていると考えられる。

痴呆性高齢者の問題行動(自主行動)を報告した先行研究は散見するが、本論では特に個々の残存している生活の中でのプラス要因に着眼する。特に、その中でも生活リハビリを通じて人との関わりをもち「誰かの役にたっている」という承認体験を通じて心理的安定を図る援助計画の策定とその実践を試みる。さらに、痴呆型デイサービスセンターにおける利用者主体となるサービス内容の検討を試みるものである。

### 2. 目的

- ①利用者の生活歴におけるプラス要因をアセスメントする。
- ②個別援助技術の一環として利用者の特技をレクリエーション援助計画に取り入れ実施する。
- ③ ①、②より得られた結果について観察評価を行なう。
- ④高齢者2名の個別援助技術とレクリエーションの関わりを確認する。

### 3. 方法

- ①対象は痴呆型デイサービスセンター利用者18名であり、この度の調査の対象となった2名についてのアセスメントは、表1と表2の通りである。
- ②痴呆型デイサービスセンター利用者に対するアセスメントは、日本レクリエーション協会作成の簡易アセスメント(1998)を参考に一部修正・加筆し著者が記入した。
- ③ ②より本人と家族の同意を得て、利用者の生活上での役割を計画策定し、実施した。
- ④利用者の援助計画策定及びその実施と評価については、日本レクリエーション協会作成による個別援助プランニングシート(1998)及び小池(1994)による観察シート並びに日本レクリエーション協会作成「個別援助評価シート」(1997)を参考に一部修正・加筆し観察、評価をおこなった。評価者は随時介護にあたるケアワーカーらと著者であった。

### 4. 結果および考察

#### 1) 生活歴におけるプラス要因のアセスメントについて

個別援助を行なう際は、利用者のアセスメントを充分に行なうことが必要である。一人の人間の情報は予想もつかないほど多量である。その中でも特に、利用者の基本的属性(氏名、性別、

年齢、出身地、家族構成)、加えて特記する疾病・障害の程度、ADL(日常生活動作)、さらには余暇自立にむけての関連情報(人間交流、集団活動、個人活動、余暇歴、仕事歴、自立援助に際して特に必要な情報)などが考えられる。さらに、近年は特に高齢化の進行に伴いながら社会福祉サービスが拡充してきたといえよう。そしてサービスの内容を概観すると“ケア”という利用者への直接的アプローチが中心に据えられ、それをベースとしてサービスの全体像が組立てられるようになってきている。そこでケアを念頭におきながら、利用者の生活内容を基礎生活・社会生活・余暇生活に分割してとらえ(千葉;1997)、これらの情報を家族より収集した。

## 2) 個別援助の展開

利用者の余暇歴から求められる援助を検討し生活のプログラムのなかに取り入れた。今まで長年生活の中で関わってきた園芸、掃除、洗濯物たたみ、食器洗い、料理、昼食の準備などを手伝ってもらい積極的に承認する場の設定を行った。人間は他者に認められながら自分の存在に気づく。個別援助の過程において誰かの役に立ったという経験を意図的にプログラムすることも援助者の重要な支援の一つであると考えられる。本研究は特に利用者の承認欲求を高める個別援助計画に主眼を置いた。以下、事例報告から、援助計画・実践内容及び評価についてふれてみたい。

## 3) 事例報告について

### 【事例① M.S】

M.S氏は86歳の女性、大分県三光村で生まれ22歳で結婚。ご主人は病弱にて早く亡くなり女手一人で農業を営み行商をしながら5人の子供を育てる。本業の合間には海に出かけ、かきやもずくをとり食事時間も惜しんで働いたと本人や家族から聴取している。1997年3月より痴呆型デイサービスを利用する。息子夫婦と同居であるが徘徊(自主行動)がひどくなり車の往来が多く危険な為に、時間延長やホリデーサービス等も利用し毎日通所している。さて、痴呆の高齢者の特徴として妄想がしばしば起りやすいといわれる。なかでも日常使用している品物や大切にしている品物を置き忘れたり、しまい込んだりすると人に盗まれた、誰かが嫌がらせをして隠したなどと疑い、自分が物忘れをしている自覚がないために身近な人をうたぐり責めるとい盗難妄想がよく見られる(長谷川・五島;1992)。本事例のM.Sさんも布袋に財布や通帳を持ち歩いており、バックの中身を確認しては棚や押し入れ、便所に隠そうとされ、利用中に何十回となくそれらの行為の繰り返しであった。事務所でお預かりして様子を観察するが、不安感は増強し何も手につかない為に肌身離さず持てるよう首から袋をさげても同じことであった。

これらの対策として、①一番信頼されている息子さんに「金品や通帳を預けている」とM.S氏に対する職員の言葉かけを統一した。②生活リハビリを主に取り組みながら園芸、こより作りやレクリエーションを通じ仲間意識を高めた。①、②よりM.S氏の攻撃的言動を少なくし安定した時間がより多く持てるようにすることを目標に取り組んだ。さらに個別援助については「主婦と農業をされていた経験から、洗濯物たたみ、食器洗い、園芸やこより作り、レクリエーションを通じて仲間意識を高め生活の中の役割がもてるようになる。またこれらの生活経験の回復から攻撃的な言動を少なくし、安定した時間がより多くなる」を本人の援助計画目標として実践に取り組んだ(表3)。

M.S 氏は何よりも仕事感覚で生きている方だけに洗濯物たたみ、掃除、ティータイム後の食器洗い等を職員と一緒にいった。また園芸活動では夏野菜や稲をベランダのプランターに植え毎日の水やり、追肥、草取り土壌づくりを手伝ってもらった。現在までの生活歴で行ってきた事を援助サービスとして提供することにより、生活の中で熟中する機会が持てたことで、M.S 氏の生き甲斐となり、表情も明るく会話も多く聞かれた。金品への執着も軽減され午前中のレクリエーションを通じて他の方と交流がもてるようになった。

## 【事例② S.N】

S.N 氏は 84 歳の男性、大分県中津市で生まれ 25 歳で結婚。実子はなく養子（一男）と養女（一女）をもうける。現在子供 2 人は他県に在住し、夫婦 2 人暮らしである。近くのデイケアを利用していたが介護者の病気の為に当園のショートステイを経て、1997 年 9 月より痴呆型デイサービス利用となる。かかりつけ病院の訪問看護も週に 2 回利用している。比較的温厚さや礼儀さが保たれているが、記憶力の低下や失見当の為にロッカーの荷物をいつも確認され、居場所に対する不安感から上着を着込み荷物を持ち、何も手につかない状態であった。また失禁が多くみられるが羞恥心のために職員の援助を受けられない。

対策として、①失禁の軽減、②趣味活動を主に生活リハビリや出来る事への働きかけを行なう、③余暇歴としてテニス、バレーボールをされていた為レクリエーションにボールを使ったプログラムを取り入れる。①、②、③の働きかけを行いながら生活史である家長的役割を援助内容に取り組む事により、生活意欲の向上を図る事を援助計画目標として実践に取り組んだ（表 4）。また、失禁に対しては本人のプライドを傷つけないように受容しながら言葉かけを行い、自宅を出る前と来館すぐに失禁の確認を行い、その後は定時及び随時誘導にて軽減した。

午前中のレクリエーションでは、馴染みのラジオ体操、ボーリング、ボール投げ、風船バレーなどで身体を動かされるようになった。また出来る事への働きかけとしては、ベランダに植えている野菜や花の水やりを行い収穫した物を部屋に飾り、意図的に紙と色鉛筆を用意して行為を促すことで積極的に写生し色付けした。また手が器用であり、美的感覚が豊かなため、絵画は夢中になり陰影をつけ細かい線まで描き、他の方が見られ誉められることで満悦の様子が見られた。折に触れ絵を話題とし、周囲から認められることで表情も明るくなった。また、本人の意志を確認した上で、移動時は他の利用者の車椅子を押す手伝いをし、女性に混じってタオルたたみや掃除など自発的に取り組む事が多くなった。荷物に対して執着心や不安感は軽減し生活意欲の向上が見られた。

## 5. 総合考察

デイサービス利用者は、職員と過ごす時間が入所型施設に比して短く、利用者を理解するには家族及び近親者との連携がきわめて重要である。デイサービス利用日以外の日はどのような生活状態であるのか。また夜間、早朝の様子など、利用者の 24 時間の生活リズムを援助者側が把握しておく必要がある。さらに、よりの確かなサービスを提供する意味でも利用者の生活歴をより深く知る必要があるといえる（伊東;1996）。

対象者 M.S 氏や S.N 氏に対する援助として過去の生活歴や職業歴、余暇歴、興味や関心がある

事柄を分析し目標を設定した。この際、短期・中期・かつ具体的な援助目標を設定し、何よりもレクリエーションテーマである人間の「自由と自主性」を重んじ、援助者側からの一方的な援助は行なわないようにした。そのためにも、自らが自発的に関わって行きたいと思うような「動機づけ」や「環境整備」を行なった。

過去に農業をされていた M.S 氏に対しては土作りから苗植え、追肥や草取り、添木など全面的に関わってもらい、S.N 氏に対しては几帳面な性格から水やりのお世話をお願いした。これらは、現在までの生活歴と現在執着している行動を見つけ出し結びつけたものである。これらの個別レクリエーション活動援助の結果、お互いの生活役割を發揮し、M.S 氏は、収穫した作物を料理にし、S.N 氏は絵の題材として、それぞれが主体的に援助サービスに関わる事が出来た。当センターでは事務所とフロアーがカウンターで仕切られており、その両面に対面式にミニキッチンを設置している。このキッチンで M.S 氏は主婦の経験から料理にいそしみ、野菜の皮をむいたり切ったりする事で昔を思い出し、輝いていた主婦の時代を回想していると推察できる。また夕刻はフロアーの窓から見える所に干してある洗濯物を取り込み、帰りの掃除や片づけなども自発的に行うようになった。S.N 氏は自分でも気付かなかった絵の才能を発見し、内面から湧きでてくる喜びや充実感、達成感、ひいては他者への関心、他者からの関心を受け容れるなど、心理面への広がりがあった。実際に承認欲求を高める個別援助を継続することにより、表 5・6 及び図 1・2 に示されるような心理的变化があらわれたことから、生活歴と現在活動中である生活要素をリンクする援助は、レクリエーション・サービス実施上意義あることと言える。過去からの生活歴と現在の執着する行動を観察、理解し、自発的行動を個別援助の一方法として取り入れた。これにより、この度の対象者 2 名にとっての生活役割は相互にサポートしあう対人交流の機会となり、他の人の役に立っているというニーズを実生活で得ることができた。加えて、自信と生活リズムを再学習（体験の回復）していくという行動が現われてきた。援助者が利用者に対して、生活上の役割を通じて誠実な感謝や敬意を示す事により、日頃はケアする立場である介護職とケアされる立場である利用者の垣根をとり除き、社会福祉基礎構造改革の理念として掲げられる「互いに支えあう関係」（平等な関係）へと一歩近づくことができた。痴呆性（重度知的後退）高齢者にも当然他の人をケアするニーズ（野村;1996）があり、そのニーズを満たす援助の解決を本事例で確認できたといえよう。

これらの調査結果を踏まえながら今後、痴呆型デイサービスセンターの援助実践において、利用者個人に対しての承認欲求を高め、自己の存在感を回復するレクリエーション援助内容の検討を一層深めていきたい。

#### <付 記>

本研究の一部は、いずみの園ケアワーカー熊井カホル氏との共同研究である。また、本研究はいずみの園「ケア研究会」における研究活動の一環であり、研究会へのご協力を頂いております。多田一三総合施設長並びに富永健司施設長に感謝申し上げます。なお、本研究は平成 9 年度日本私学振興財団、平成 10 年度永原学園特色ある研究基金及び平成 13 年度三菱財団社会事業並びに研究助成の交付を受けたものであり、研究助成に対し厚く御礼申し上げます。